

自助共助による高齢者の脱制度型たまり場に関する研究

建築計画分野 A06TD023 藤枝雅昌

1. 研究の背景と目的

我が国の高齢者人口は年々増加している。この前例のない高齢化社会において、これからの高齢化対策・高齢者福祉制度にはますます注目が深まっている。現在の高齢者福祉制度は老人ホームなどの福祉施設、デイサービス・グループホームなどの通所型・在宅型福祉センターを基盤としている。このような施設では高齢者は自由を失い、介護者の思うままに動かされ、高齢者自身で生活を組み立て、助け合いながら生活力を養っていきけるような取り組みはあまり見られない。これから我が国の高齢化は進行していくうえで、労働層が高齢者を介護してくるような施設に頼った介護制度はいずれ限界を迎えるだろう。現在の介護制度を見つめ直し、高齢者が高齢者同士で協力し助けあって生活していく社会をつくるのが今後どんどん深刻化していくであろう高齢化・高齢者福祉問題解決の手がかりになるのではないだろうか。本研究では、福祉・介護制度に頼ることない脱制度型の高齢者地域コミュニティ形成の場を取りあげ、その場の実態を明らかにし、今後の高齢者福祉・介護問題解決への手がかりを探ることを目的とする。また本研究では、非制度的な高齢者の居場所をたまり場と呼称する。

2. 対象地域と研究方法

本研究では一つめとして大阪市東成区今里地区、二つめとして寝屋川市友呂岐緑地周辺を対象地域とした。

これらの対象地域において、地域コミュニティが形成されている非制度的な空間（＝たまり場）の実態や特徴として存在意義などをたまり場の実測調査、および観察・ヒアリング調査によって明らかにする。

それぞれの地域で協力を依頼し、8件のたまり場の実測調査を行った。またそれぞれのたまり場でヒアリング調査を依頼し34人から協力を得られた。

3. たまり場の分析

3.1 たまり場の実態

□ 過ごし方

図1の事例から高齢者のたまり場での過ごし方を考察する。今里西之口公園は毎朝のラジオ体操がたまり場での定例行為となっている。ここではラジオ体操をするだけではなくラジオ体操をしながら、近くの人と会話をしている姿も見られた。新道パト리는無料の地域交流施設であり、施設内は時間等の制限はなく自由に過ごせる場所となっている。施設にはボランティアが常駐しており、主な行為として、ボランティアと高齢者の会話が見られ、次いで、高齢者同士の交流が見られた。また誰も関わろうとせずお茶を飲んで休憩する高齢者や、編み物をする高齢者、商店街で弁当を買ってきて新道パトリで食事をする高齢者もいるなど多様な行為が見られた。友呂岐緑地では将棋が定例行為となっており、将棋を媒介として会話等のコミュニケーションが生まれていた。



図1 たまり場の事例

Study on deinstitutionalized hangouts of the elderly by self-help and mutual aid

□集まり方

表1より、集まる人数と定例行為の有無の関係を見ると、ラジオ体操や将棋などの定例行為があるたまり場では規模の大小に関わらずそれ

場所	おおよその規模	集まる平均人数	定例行為
今里西之口公園	148㎡	30~40人	ラジオ体操
今里公民館	50㎡	20~30人	イベント
新道バトリ	43㎡	5人程度	無
安田宅	17㎡	3~5人	無
新道橋	108㎡	3~5人	無
友呂岐緑地1	51㎡	約30人	将棋
有呂岐緑地2	100㎡	約10人	無
萱島駅高架下	150㎡	3~5人	無

表1 規模と集まる人数と定例行為の関係

ぞれ30人程度集まっており、定例行為が無いたまり場は10人以下しか集まっていないことがわかる。このことからたまり場に定例行為があることにより、その定例行為きっかけに高齢者が多く集まることがわかった。

3. 2 たまり場の性質

それぞれのたまり場の実態から、たまり場は4つの性質を有する空間であることがわかった。

自由さ 高齢者福祉施設等では高齢者はスケジュールに合わせて生活するので均質な行動を強いられるが、たまり場においては、高齢者は行動を束縛されることなく自由に過ごすことができる。

自発性 高齢者福祉施設等においては、介護者が高齢者の行動をスケジュール化しており、高齢者の自発的な行為は望めない。しかしたまり場での過ごし方は高齢者が自らの意思で決めている。これらより、たまり場は高齢者の自発性を生むという性質があるといえる。

多様性 たまり場での行動の自由さ、自発性が行動の多様性を生んでいると考えられる。たまり場では会話・食事・飲酒・喫煙・体操・将棋・編み物など様々な行為が生まれている。

雰囲気づくり 高齢者同士の交流が多く見られるたまり場においてはその交流がたまり場の雰囲気に直結していると考えられる。しかし高齢者福祉施設等では、主に介護者が施設の雰囲気をつくっており高齢者の行動が直接雰囲気にはつながりにくい。つまりたまり場は高齢者による雰囲気づくりがあるといえる。

3. 3 たまり場の分類

またそれぞれのたまり場の実態・性質からたまり場は形成のきっかけ別に3つのグループに分類できることがわかった。

(図2参照)

□場所が形成の主な起因となるたまり場

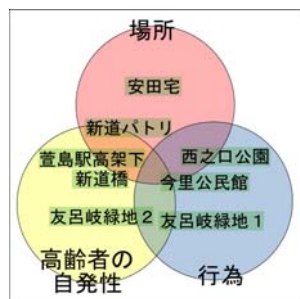


図2 たまり場の分類

内部空間であり、もともと人が集まることを計画してつくられた場所であり、高齢者がその「場所」に集まることがきっかけに形成されたたまり場である。比較的自由度が高い。

□行為が形成の主な起因となるたまり場

高齢者が「ラジオ体操をする」「将棋をする」などの共通の「行為」をすることを目的に集まることがきっかけに形成されたたまり場で高齢者が集まりやすい。

□高齢者の自発性が形成の主な起因となるたまり場

外部空間でありベンチ等が置いているものの、特別な定例行為もない場所であり、高齢者の、散歩の休憩などの立ち寄りがきっかけに形成されたたまり場。自発的で多様な行為が生まれている。

4. たまり場の存在意義

表2から、人間関係において、たまり場での会話等のコミュニケーションにより、高齢者同士の密な関係が形成され、それが地域のつながりを生んでいるといえる。さらにたまり場を通じての、高齢者同士の身体的または精神的な改善も見られる。このような高齢者同士の支えあいによる改善は、高齢者福祉施設等では見られることはなく、たまり場特有のものである。

これらより、たまり場は高齢者の自発性を助長する場所であり、高齢者の生活の質を向上させる因子であるといえる。

人間関係	身体的・精神的变化
<ul style="list-style-type: none"> ・〇〇さんが来んかったらどうしたんやろうっていうのはあるよね ・4~5日来んかったら、「いやあ、どうはったんやろう」ってみんなで心配するもんなあ。 ・3日か4日行かんかったら「何で来なかったん」って心配してくれはる。 ・みんなそれぞれ勝手に集まって、何ヶ月かしたら知らんうちに仲良くなった。 ・おじいちゃん同士でそんなもんやん。 ・ここで初めて会う人はたくさんいるけど、そのような人はスーパー等で会ったらあいさつや軽話をするようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなラジオ体操やっている人は元気やな。普通の70歳よりずっと体やわらかいわ。 ・みんな健康的やな。もちろんみんな高齢者やからそれぞれどこしに病気とか抱えてはるけど、精神的に元気やね。 ・会話をすることで元気になったりとかはあります。心のよりどころになっていたりとかはあると思います。 ・精神的にちよつと問題があるかたでも、この場を提供することで人しやべるきっかけになっているみたいなので、そういうところはいいかと思います。

表2 たまり場の様子

5. 結論

たまり場はそれぞれ様々な特徴を持つが、総じて高齢者間の人間関係を密にする場所であり、たまり場内でのコミュニケーションが雰囲気を良くし、習慣性・常駐性を生まれやすくしていることがわかった。そしてその習慣性・常駐性がさらに多くの人を呼び込み、地域としてのつながりも密になると考えられる。また多くの高齢者が来ることにより、様々な行為が生まれる。たまり場の過ごし方に多様性が生まれることで、たまり場の質が向上することにより、高齢者にとってたまり場が必要不可欠な場所になっていくと考えられる。対して、高齢者福祉施設等の制度的な場所においては、介護者と高齢者の人間関係は深まるが、高齢者間の人間関係は深まりにくい。高齢者間の人間関係が深まらなければ、地域のつながりも生まれにくい。

これらのことより、たまり場は高齢者のみならず地域にとっても必要不可欠な空間であることがわかった。

このような自助共助による高齢者の脱制度型たまり場が、現在の高齢者福祉制度・介護制度の改善に役立つことを期待したい。